県独自のCAN-DOリストで学ぶ喜びのある英語教育を

――兵庫県教育委員会の取り組み

実社会はもちろん、大学入試においても実践的な英語力が求められる近年、多くの自治体が独自のCAN-DOリストを策定し、県下の高校に活用を奨励している。そうした中、兵庫県では、2014年度、県教育委員会が主導して独自のCAN-DOリストを作成し、全県への波及を目指している。今号では、その作成委員の教師に、作成時の工夫や留意点、リスト活用の意義などを聞いた。

「生徒の夢」を後押しするリストの作成を目指して

――「兵庫版基本CAN-DOリスト」（P.27図1）作成の経緯を教えてください。

桂　2012年度に始まった文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」において、本県では5つの県立高校を拠点校に指定し、2年間、CAN-DOリストを活用した授業改善を進めました。その取り組みで各校が上げた成果を県下に広げようと、「兵庫版基本CAN-DOリスト」（以下、基本CAN-DOリスト）の作成が企画されたのです。14年5月に、東京外国語大の根岸雅史（まさし）教授を委員長とする構想委員会を立ち上げ、5つの拠点校で取り組みを主導してきた先生方による作成委員会を結成し、基本CAN-DOリストを作成しました。15年3月に公開し、それを基に各校の実情に応じたCAN-DOリストの作成を進めています。

――作成に当たってどのような点に留意されましたか。

桂　県内の全ての高校で活用できる汎用性を持たせることです。拠点校事業で各校が作成したCAN-DOリストは、学校によって到達目標も形式も異なります。「兵庫版」では、生徒の進路が多様な学校から大学進学者が多い学校まで、あらゆる高校が生徒の実情に応じた学習到達目標を設定できるよう、4技能ごとに12の到達目標を細かく設定しました。また、出来るだけ多くの生徒が「学ぶ喜び」を味わい、学習意欲を高めるために、上から下に行くにつれて難易度が上がるように配列し、各ディスクリプタ（「～することが出来る」という能力記述文）は、生徒が英語に触れる場面を幅広く想定したものにしています。

もう1つこだわったのは、英語教育に対する生徒の期待を盛り込むことです。生徒自身がどのような力を身に付けたいのか、英語を使って何をしたいのか。そうした「生徒の夢」の実現を後押しするリストであるべきだという根岸教授の指摘を受け、県教委では県立高校生1万4727人にアンケートを実施しました。調査の結果、生徒

兵庫版 基本CAN-DOリスト作成委員会メンバー

兵庫県・私立滝川中学・高校
CAN-DOリスト作成委員会委員長
越前伸也 えちぜん・しんや

教職歴36年。同校に赴任して1年目。留学支援センター長。元・兵庫県立宝塚西高校校長、兵庫県高等学校教育研究会英語部会会長。

兵庫県立芦屋国際中等教育学校
CAN-DOリスト作成委員会副委員長
杉本嘉良 すぎもと・よしお

教職歴36年。同校に赴任して3年目。3学年主任。リストでは、「聞くこと」を担当。

兵庫県立明石城西高校
大倉健三 おおくら・けんぞう

教職歴27年。同校に赴任して7年目。SGH準備委員長。3学年担任。リストでは、「書くこと」を担当。

兵庫県立姫路東高校
河岡佳子 かわおか・けいこ

教職歴27年。同校に赴任して2年目。2年次副主任。リストでは、「読むこと」を担当。

兵庫県立龍野高校
篠原友妃亜 しのはら・ゆきあ

教職歴16年。同校に赴任して3年目。3学年担任。リストでは、「話すこと」を担当。

兵庫県立明石西高校
西﨑善久 にしざき・よしひさ

教職歴34年。同校に赴任して3年目。2学年担任。リストでは、「文化理解」を担当。

兵庫県立武庫荘総合高校
柳瀬 学 やなせ・まなぶ

教職歴25年。同校に赴任して1年目。2学年担任。リストでは、「論理的思考力」を担当。

兵庫県立網干高校
山田義夫 やまだ・よしお

教職歴32年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。リストでは、「読むこと」を担当。

兵庫県教育委員会事務局
桂 敦子 かつら・あつこ

教職歴22年。高校教育課主任指導主事。

は、英語で音楽を聞く、歌うなどの評価の対象にならない活動が好きなことや、将来仕事をする上で英語力が必要だという意識が強いことが分かりました。作成委員には、アンケートの結果を出来る限り基本CAN-DOリストに反映するように意識してもらいました。

作成に当たっては、技能ごとに担当者を決め、各自で素案を作り、ディスクリプタの文言や並び方は妥当か、生徒に分かりやすい表現になっているかを委員会全体で検討し、精度の高い内容となるように心掛けました。

幅広い学力層に応じたディスクリプタの作成

――基本CAN-DOリスト作成で留意された点をお聞かせください。

山田 私は「読むこと」を担当しました。最も難しかったのは、あらゆる学力層の生徒が使えるディスクリプタを設定することです。

私が勤務してきたのは専門高校や生徒の進路が多様な学校が多く、英語の得意な生徒を想定したグレード設定や活用場面があまりイメージできませんでした。委員会に参加し、大学進学者が多い学校の先生や専門家の方から様々な知識や情報を得ることで、高校教育で求められる英語表現の幅の広さを知ることが出来ました。

篠原 私は、「話すこと」を担当しましたが、私もディスクリプタのグレード設定が課題でした。どうしても自分の指導経験に基づいてグレードを考えてしまうため、他の委員の先生と見解の違いが生じることが少なくありませんでした。例えば、私は電話でのコミュニケーションをそれほど難しいと考えませんでしたが、相手の顔が見えないので難易度は高いという指摘がありました。委員会で的確なアドバイスがあったことで、発表とやりとりといった2つの場面をバランスよく配置し、かつグレードが上がるほど即興性が求められる実践的なリストが出来たと思います。

桂 グレードの妥当性の検証も、委員会の課題の1つでした。基本CAN-DOリストの素案が出来た段階で、県立高校8校の教員62人と生徒約900人にアンケートを

実施しました。先生方にディスクリプタを別々に示し、それぞれ自身が考えるグレード順に並べ替えて、その理由も回答してもらいました。生徒には、各ディスクリプタの達成度を4段階で自己評価させ、集計結果を根岸教授に分析していただき、グレードの妥当性を確認した上で公表しました。

教師目線に陥らない分かりやすい表現が重要

――ディスクリプタの文言や表現で苦労された点はありますか。

河岡　私は、山田先生と一緒に「読むこと」を担当しました。当初作成したディスクリプタは、スキャニングやオープンエンドといった教師目線の表現が多く、高校生に分かる表現にした方がよいとの指摘を受けました。また、授業中に行う活動と、日常的に生徒が英語に触れる場面が混在しており、整理が必要でした。ディスクリプタの文言やグレード設定は本当に難しく、今でも基本CAN-DOリストを見ると、つい表現や難易度をチェックしてしまいます。

大倉　私も、ディスクリプタの文言には苦労しました。私は「書くこと」を担当しましたが、当初、主語や動詞などの文法用語を多用してしまい、先生方から「もっと具体的な場面に即した文言にすべき」との指摘を受けました。一口に「書くこと」といっても、論文か、手紙か、仕事のメールかによって違いますし、それぞれの難易度の設定にも悩みました。文法の正確さ以前に、本当に伝えたいことがあるのかも大切です。特に、グレードの高い項目では、自分の感情やアイデア、体験を踏まえた文章が書けるかどうかにこだわりました。

生徒の達成感と教師の指導力の向上に期待

――基本CAN-DOリストの作成を通して、授業やCAN-DOリストの活用に対して、ご自身の意識の変化はありましたか。

杉本　私は、「聞くこと」を担当しました。委員会に入った当初は、私自身、CAN-DOリストの必要性に懐疑的でした。しかし、基本CAN-DOリストを作成していくうちに、その考えは変わりました。生徒は、ネイティブスピーカーの流暢（りゅうちょう）な英語と比べて、「自分は英語が出来ない」と消極的な気持ちになることが少なくありません。しかし、CAN-DOリストがあれば、生徒はディスクリプタを見ながら、「これが出来るようになった」と自身の成長を実感し、英語を学ぶことが楽しく感じられるようになると考えを改めました。かつての私のようにCAN-DOリストに懐疑的な先生がいるのであれば、そうした先生方に働き掛けていくことも、私たちの使命だと考えています。

大倉　私は拠点校事業の際に、GTEC for STUDENTSを参考にしてCAN-DOリストを作成しました。その時は、リストの意義を深く理解しておらず、本当に必要なのかと疑問に思ったこともあります。しかし、今回、ディスクリプタを作るうちに、生徒自身の成長が見えるのは良いことだと感じ始めました。私も授業では活動を多く取り入れており、それなりに盛り上がるのですが、しばしば「やりっぱなし」になってしまうことがありました。生徒の力を伸ばす授業になっているかを検証するためにも、CAN-DOリストは有効だと実感しています。

4技能のベースとなる意欲・思考力・文化理解

――基本CAN-DOリストでは、4技能に加えて、意欲や思考力、文化理解を3領域として設定しています。どのような意図があったのでしょうか。

桂　兵庫県の第2期「ひょうご教育創造プラン」で示した目指すべき人間像や培うべき力を育成するために、4技能に加えて、「関心・意欲・態度」「論理的思考力」「文化理解」の3領域を「英語学習を支える3領域チェックリスト」（P.29図2）として設定しました。当初はこれもグレード化する予定でしたが、学びへの姿勢や文化理解に対する受容の仕方は人それぞれなので、順位付けは難しいということで見送りました。3領域については、自分はどれに当てはまるのかを生徒自身が確認し、その項目を増やしていく使い方にしました。

図1 「兵庫版基本CAN−DOリスト」（抜粋）

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
1	・ゆっくり話されたら、“Stand up”“Sit down”“Come here”という短い指示を理解することができる。 ・日常生活の身近な単語を聞いて、意味を理解することができる。 ・簡単なあいさつの言葉を聞き取ることができる。	・日常生活の身近な単語を発音することができる。[発表] ・簡単な質問に対してYes/Noを使って、答えることができる。[やりとり] ・教室でよく使われる“Stand up”“Sit down”“I'm fine.”などの簡単な表現ができる。[やりとり]	・ブロック体で書かれたアルファベットを正しく認識することができる。 ・日常生活の身近な単語の意味を理解することができる。 ・日常生活の身近な単語で書かれた短い英文の内容を理解することができる。	・アルファベットの大文字、小文字をブロック体で書くことができる。 ・簡単な単語・語句・短い文を正確に写すことができる。 ・日常生活の身近な単語や数字（1～10）を正確に書くことができる。
2	・ゆっくり話されたら、数字・曜日・季節などの情報を正確に聞き取ることができる。 ・ゆっくり話されたら、授業でよく使われる指示を理解することができる。 ・ゆっくり話されたら、ALTの自己紹介を理解することができる。	・簡単な自己紹介（氏名、学年、学校、家族、住所など）をすることができる。[発表] ・日常生活の簡単なあいさつや数字、日付、季節、天気を伝えることができる。[やりとり] ・相手の言っていることがわからない時に、繰り返してわかりやすく話してもらうよう頼むことができる。[やりとり]	・簡単な地図を見て○○ station, △△ hospital , ×× store などを探すことができる。 ・すでに習った単語で書かれた短い英文の内容を理解することができる。 ・絵や写真つきのファストフード店のメニューを理解することができる。	・曜日や月名、数字（2ケタ）を正確に書くことができる。 ・身近な事柄や情報に関して、語句を並べて短いメモを書くことができる。 ・自己紹介カードに氏名、学年、学校、家族、住所などを記入することができる。
9	・自然なスピードで話されても、日常生活での会話を理解することができる。 ・海外のニュース（BBC・CNNなど）を聞いて、映像を参考にすると、内容を部分的に理解することができる。 ・映画やテレビドラマの会話の流れを理解することができる。	・パワーポイントなどを用いて身近な社会問題についてプレゼンテーションをすることができる。[発表] ・電話で相手と会う約束をすることができる。[やりとり] ・身近な社会問題について、準備をした上で、簡単な議論をすることができる。[やりとり]	・社会的な問題に関する連続した複数の段落から構成される英文を読み、各段落の内容を理解し、英文の流れを把握することができる。 ・日本の英字新聞（The Japan Times/The Japan News など）で身近なテーマや興味のある内容の短い記事を80%以上理解することができる。 ・概要や要点を把握するために流し読みをしたり、自分が欲しい情報を拾いながら目的に応じて読むことができる。	・時間の流れに従って、旅行記、自分史、身近なエピソードなどを書くことができる。 ・いくつかのパラグラフを使い、流れが分かる文章を書くことができる。 ・日本や自分が住んでいる地域の伝統文化を詳しく紹介する文章を書くことができる。

リストは4技能についてそれぞれ12段階で示している。＊兵庫県教育委員会からの提供資料を一部抜粋して編集部で作成

柳瀬　私は3領域の中の「論理的思考力」を担当しました。私がこの領域に興味を持ったのは、そもそも4技能の本質について疑問があったからです。例えば、スピーキングでは、流暢（りゅうちょう）さと正確さが大切だと言われていますが、「1分間当たりの発話語数が多い」「正しい文法で話すことが出来る」といった結果だけで、本当にスピーキング力が付いたと言えるのでしょうか。人によっては、発話は流暢でも中身がない場合があります。表現の質を高めていくためには、4技能を磨くと同時に、その土台となる論理的思考力を鍛えることが大切です。「自分の考えをまとめる力」「他者の考えを理解する力」の2本柱を設定し、生徒が自己評価する上で意識化できるような文言の作成を目指しました。

西﨑　私の担当は、「文化理解」です。英語教育では「異文化理解」とすることが多いと思いますが、単に外国文化の知識を増やすだけではなく、日本との相違や類似性を意識した上でコミュニケーションを図ることが大切であるという観点から、「文化理解」と呼ぶことになりました。

当初、チェックリストを考えるのが面白く、たくさん作って委員会に提示したのですが、「表現が同じ」「文言があいまい」といった理由で削除され、作成の途中で行き詰まってしまうこともありました。「ひょうご教育創造プラン」と学習指導要領を土台に考えるよう先生方からアドバイスをもらい、「理解するための視点」と「情報の収集と伝達の視点」の2つを縦軸に、創造プラン・指導要領を横軸として集約することが出来ました。

3年間掛けて全教師に研修を実施

――全校にCAN−DOリストを配布後、県下の先生方の意識に変化は見られているのでしょうか。

桂　15年9月に、各校独自のCAN−DOリストの作成状況を調査したところ、ほぼ全ての学校が作成に着手していました。また、県教委では、15年8月から3年間を掛けて、県立高校の全ての英語科教員を対象に、基本CAN−DOリス

トの活用とアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた研修会を行う予定です。その中で、各校がどのようにCAN-DOリストを活用し、成果を上げているのかを具体的に把握したいと考えています。

篠原　学校現場に、基本CAN-DOリストが浸透しているのを感じます。研修に行くと、若手教員から「今、本校のCAN-DOリストを作っているので見てください」「『兵庫版』を参考に作っています」という声をよく聞きます。本校では、熱心な生徒がいつも授業にCAN-DOリストを持参し、その日の活動がどのような力に結び付くのかをチェックしています。

大倉　拠点校事業の際には、教員間に戸惑いや不安を感じました。当時よく話していたのは、基本CAN-DOリストは先生方のこれまでの指導を否定するものではなく、互いに手を取り合って前に進むためのロードマップだということです。幸い、本校では、拠点校事業初年度の生徒が大学入試で良い結果を出し、更に、生徒へのアンケート結果から、自身の成長を実感している様子が見られました。今では、先生方も成果を実感し、4技能に対する意識は格段に向上しています。

桂　県教委では、基本CAN-DOリストを各校の実情に応じて調整し、指導案に落とし込んでもらうための活用ガイドを公表しています。また、教師に求められる指導力を示した「教員のためのTo-Doリスト」も作成し、配布しました。4技能をバランスよく授業に盛り込んでいるかどうかを、教員自身がチェックできるようになっており、授業改善・指導力向上につながることを期待しています。

変化する大学入試への対応も考慮

――基本CAN-DOリストを作成する際、大学入試との関連についても議論されたのでしょうか。

越前　近い将来、大学入試は大きく変わると言われています。それに伴い、高校も4技能重視の指導に変わらざるを得なくなるでしょう。私立の中高一貫校は既に強い危機感を持ち、今の中学1年生から指導を大きく変え始めています。国内でも、英語が出来なければ会議にも出られない会社があると聞きます。そうした社会の変化を肌で感じている保護者も多く、英語教育に対する期待や要望はますます大きくなり、CAN-DOリストのニーズも高まると考えています。

桂　次期学習指導要領では、4技能をバランスよく習得させることが重視され、大学入試では英語の外部検定試験のスコアを用いるなど、4技能重視の方向に舵（かじ）が切られつつあります。これまで大学入試があるからといって訳読中心の授業をしていた教員も、変化する大学入試に対応するために、授業を変えざるを得なくなるでしょう。

柳瀬　センター試験では、教科書約25ページ分を80分で読めないと得点できなくなっています。更に、模試は既に変わっています。以前は「下線部分を和訳せよ」という問題が典型でしたが、今は解答となる該当箇所が、行間まで読み取らないと正解できないといった問題がよく見られます。いつまでも同じ教え方をしていてはいけないということに、英語教師は1日も早く気付かなければなりません。

「兵庫版」は県の英語教育を変える第一歩

――今後に向けての抱負をお聞かせください。

西﨑　これからは生徒が主役になる授業を意識していきたいと思っています。教師がどれだけ素晴らしい英語を話しても、生徒が聞くだけでは、生徒の英語力は上がりません。教師はファシリテーターに徹して、生徒同士のコミュニケーションを促し、生徒が英語を使う必然性を感じられるような授業をしていきたいと思います。

山田　ベテラン教師ほど指導を変えづらいと言われますが、委員会に参加し、自分の意識が変わったことが、私にとっての最大の成果でした。今後は、多くの先生に基本CAN-DOリストの意義を伝え、ご理解いただき、指導に還元してもらえるように働き掛けていきたいと思います。

篠原　指導と評価の一体化の重要性が問われて久しいですが、実際に運用してみて、CAN-DOリス

図2 「英語学習を支える3領域チェックリスト」（抜粋）

関心・意欲・態度	
【学習ストラテジー】 ①わからない言葉や用法があれば、辞書を使って自分で調べている。 ②英語力を向上させるために、自ら進んで家庭学習に取り組んでいる。 ③習った表現を使って、書いたり話したりしようとする姿勢を持っている。 ④自分の伝えたいことを表現するために、必要な言葉や用法を辞書やインターネットで調べ、自分で表現力を高める努力をしている。（後略）	【コミュニケーションストラテジー】 ①間違いを恐れず、英語を話している。/ ボディランゲージなどを使って、なんとか言いたいことを伝えている。 ②一人ひとりの意見や考えが多様なものの見方を教えてくれることに気づき、他者及び自分の意見や考えを尊重している。 ③会話中に必要な情報が聞き取れなかった場合は、相手に質問し、確認している。 ④ペアワークやグループワークで、できるだけ英語で意見を述べたり、話し合ったりしようとする姿勢を持ち続けている。（後略）
論理的思考力	
【自分の考えをまとめる力】 ①自分の意見をメモ等を使って整理した上で、わかりやすく相手に伝えている。 ②自分の意見をいくつかの具体例を交えながら、わかりやすく相手に伝えている。 ③英語で聞いたり読んだりしたことについて、日本語で自分の意見をまとめる際、文と文の論理的な関係を示すことば（ディスコースマーカー）を意識している。 ④英語で自分の意見をまとめる際、文と文の論理的な関係を示すことば（ディスコースマーカー）を効果的に使っている。（後略）	【他者の考えを理解する力】 ①他者の意見を聞いて、その内容を部分的にでも理解している。 ②他者の意見を聞いて、その内容の真偽を客観的に判断している。 ③他者の意見を聞く際、文と文の論理的な関係を示すことば（ディスコースマーカー）を意識して、主張を大まかに理解している。 ④他者の意見を聞く際、文と文の論理的な関係を示すことば（ディスコースマーカー）を意識して主張を正確に理解している。（後略）
文化理解	
【理解するための視点】 ①自分の住む町や観光名所などで困っている外国人を見かけると、積極的に手助けしている。 ②短期間であれば、海外のホームステイプログラムに参加しようと考えている。 ③異なる文化に興味を持つとともに、自国の文化との相違点を意識している。 ④自分の住む町の風俗習慣と外国の風俗習慣との相違点や類似点を理解している。（後略）	【情報の収集と伝達の視点】 ①身近な事柄や日常生活に関する話題について友人と話をしている。 ②趣味や家族、将来の夢などについて、クラスで情報交換をしている。 ③異なる文化について興味のある話題や情報を、書籍やＴＶ、インターネット等を通じて理解を深めている。 ④学校の授業以外でも、書籍やＴＶ、インターネット等を通じて、海外からの情報を自ら進んで取り入れている。（後略）

３領域を更に２つに分類し、各９つの指標を提示。上図では各４つを抜粋して掲載した。＊兵庫県教育委員会からの提供資料を一部抜粋して編集部で作成

トこそ、その最たるものだと感じています。生徒の力を伸ばすためだけではなく、私自身の授業改善につなげていけるよう研鑽を重ねていきたいと思っています。

杉本　自分が感じたような意識変革を他の先生とも共有したいというのが、今の一番の思いです。また、今の紙ベースだけでなく、スマートフォンのアプリケーションなど、生徒が興味を持つようなツールを用いて、楽しみながら使えるＣＡＮ-ＤＯリストを考案したいと考えています。

河岡　先日、あるセミナーで「分かる授業だけではなく、伸ばす授業を目指してみてはどうか」と聞きました。生徒にタスクを課して小さな成功を積み重ねていくＣＡＮ-ＤＯリストは、まさに伸ばす授業につながると思います。本校でも早くＣＡＮ-ＤＯリストを完成させ、生徒自身に成長を実感させる授業を展開していきたいです。

柳瀬　英語教育が大きく変わろうとしている今、多くの英語教師が不安を抱えています。そういった不安に対して、どこを目指していけばよいのかを示してくれる地図と方位磁石の役割を果たすのが、ＣＡＮ-ＤＯリストだと思います。その意味で、非常にタイムリーな取り組みであり、私自身も先生方との目線合わせのツールとして積極的に活用していこうと思います。

大倉　最初の構想委員会で、根岸教授がＣＡＮ-ＤＯリストを「夢のリスト」と言われたことが、今でも忘れられません。「兵庫版」は完成しましたが、これが最終形ではなく、兵庫の英語教育が変わる第一歩に過ぎません。その作成にかかわったことを光栄に思い、より良いものにしていくために実践を積んでいきたいと思います。

越前　英語教育で難しいのは、教師の意識改革です。どんな良いものが出来ても、先生方の意識が変わらなければ有効に活用できません。先生方は多忙であり、大学入試のプレッシャーも大きく、なかなか新しいことに挑戦できないかもしれませんが、まずは熱心な先生方が率先して基本ＣＡＮ-ＤＯリストを活用し、少しずつ風穴を開けていくことが大切だと思います。